

総合文化研究所 Workshop Series 第二回 「文明の黄昏に咲くロシア文化の花——同伴者作家B・ピリニャークが奏でた革命のエチュード——」 発表.. 佐藤貴之

報告 山口裕之

総合文化研究所 Workshop Series は、若手研究者の研究発表と討議の場として企画されている。二〇一六年七月一三日に総合文化研究所で開催された第三回のワークショップでは、ピリニャークを研究の中心に据えている佐藤貴之氏の発表が行なわれた。佐藤氏の関心の所在は、十月革命後のソ連社会における文化的アイデンティティの変容にある。佐藤氏はこの発表の時点でピリニャークに関する博士論文執筆の終盤を迎えており、この発表は博士論文の主要な論点を取り上げるものであった。

一八九四年にモスクワ近郊で生まれたボリス・ピリニャークは、ロシア・アヴァンギャルドの時代の作家である。彼は社会主義を受け入れつつも自ら直接かかわることのない「同伴者」作家の一人と位置づけられているが、彼にはアヴァンギャルドにみられる前衛性と、その対極にあるような反動的思想という両極的な特質が備わっている。機械的なもの・西欧的なもの・文明といったキーワードによって言い表されるような先進性・前衛性を示す一方で、ピリニャークの「反動的」特質は、シュペングラーの保守革命的な思想から影響を受けたドイツ的な精神性ととともに、「スキタイ主義」と呼ばれる東洋的特質と結びついていることを佐藤氏は指摘する。それによって、佐藤

氏が浮き上がらせようとしているピリニャークの前衛性と反動性という両極は、また別の面では、「西洋的」なものと「東洋的」なものが混濁する「ロシア性」の探求という問題にもつながってゆく。佐藤氏は、この二つの論点（前衛性と反動的思想、西洋的特質と東洋的特質）を考察の軸に据えながら、ピリニャークの名著『裸の年』（一九二〇年）、『機械と狼』（一九二四年）、あるいは『ヴォルガはカスピ海に注ぐ』（一九二九年）といったテキストとそこで展開される思想について言及していった。佐藤氏の研究は、ピリニャーク研究であることはもちろんのこと、ロシア的なもの（スチヒーヤ）の内包する複合的な両極的特質に光を当てることによって、ロシア・アヴァンギャルドのかかえる特質を描き出す可能性を見せてくれた。

ピリニャークはまた、日本とも関わりの深い作家である。佐藤氏の発表では、大正期の日本の作家や知識人との交流、著作『日本印象記』（一九二六年）についても紹介された。